

しろや！ 広島城

Let's know Hiroshima Castle.

No.14

ひろしま歴史の小耳 14
（「広島城の50年シリーズ⑥」）

平成の広島城

－史跡整備と天守閣の受難

1. 史跡整備・二の丸復元と堀の浄化工事

平成元年（1989）の天守閣展示更新を終えた後も、史跡広島城の整備が続きました。二の丸の建物の大部分は昭和20年（1945）まで残っていましたが、被爆によって焼失し、その後石垣を残すのみになっていました。この失われた建物を、多くの人々に広島市の被爆以前の歴史・文化をよりいっそう理解してもらうことを目的に復元することになったのです。天守閣が歴史資料館として再スタートした日（平成元年4月15日）に鍬入れ式が行われ、同年6月28日に本格的に復元工事がスタートしました。天守閣が鉄筋コンクリートなのに対し、二の丸は木造で、できる限り昔の工法で再建されることになりました。天守閣の再建と同じように、工事に際しては絵図・古文書・古写真・実測図など残された資料や発掘調査の成果、さらに古建築の考え方などを手がかりに、様々な考察が行われました。その結果を基に工事は進められ、まず平成3年（1991）12月28日に表御門と御門橋が、ついで平成6年（1994）に平櫓・多聞櫓・太鼓櫓が竣工しました。被爆により姿を消した二の丸もまた現代に甦ったのです。

二の丸の復元と同時に着手されたのは内堀の浄化事業でした。江戸時代、広島城の堀は外堀・中堀・内堀で構成されており、外堀の北東隅にあった通称羽子板堀から本川の水が引かれて各堀を循環していました。しかし明治19年（1886）以降に本川から水を引き込んでいた取水口が埋め立てられた

のを皮切りに、同42年から44年にかけて外堀の埋め立て工事が行われ、その後、段階的に中堀も埋め立てられ、昭和30年代には内堀を残すのみになっていました。この巨大な「溜め池」状態の内堀の問題がこのころからクローズアップされるようになってきます。まず、周辺の開発によって地下水位が低下してしまい、それに伴って堀の水が枯れてしまいました。これを防ぐため、昭和44年（1969）に地下30メートルから地下水を汲み上げるように2基のポンプを設置し、堀の底には、水が地下にしみ込まないようにポリエチレンフィルムを敷く工事が行われました。これで堀の水を保つことができるようになりましたが、やがて堀に放された鯉や白鳥の餌の残りや排泄物によって水が汚染されてしまいました。このことに対処するため、昭和51年（1976）には水中に酸素を補給するために水をまくスプリンクラーが設置され、昭和53年（1978）と59年（1984）には堀の水を抜いて沈殿物を除去し消毒する堀干しが行われました。さ



復元工事途中の二の丸

表御門と御門橋は完成していますが、平櫓・多聞櫓・太鼓櫓はこれから工事が始まるところです。なお、この時、堀の工事も行われており、水が干上がっています



水が抜かれた内堀

堀底に堆積した汚泥を処理するため、堀の水が抜かれている状態です。作業のために重機が入っています

らに昭和61年(1986)、63年(1988)には水中をかき混ぜ空気を入れるミキサーも設置されましたが、結局根本的な解決にはならなかったのです。

やがて浮上してきたのが「ふたたび太田川の水を内堀に循環させる」というプランでした。そのために旧太田川から内堀までの導水施設および内堀から旧太田川までの流出施設を建設することになったのです。また、内堀の汚泥が旧太田川に流出するのを避けるため、底泥の処理も同時に行われることになりました。工事は建設省(現国土交通省)と広島市が行い、前者が導水施設の工事を、後者が流出施設と底泥処理を受け持ちました。

平成元年(1989)に着工した工事は平成5年(1993)10月7日に竣工、通水式が行われ、内堀に再び川の水が戻ってきたのです。水が綺麗になった直後にはユスリカの大発生などがありましたが、その後の発生は見られず、悪臭もなくなりました。現在では、ホシハジロ・キンクロハジロ・カイツブリなどカモ類の越冬地にもなり、年々その数が増えています。

なお、一級水系である旧太田川と水を循環させるにあたり、平成2年(1990)に内堀と流出路が、平成6年(1994)に導水路が準用河川に指定されています。

2. 天守閣の受難・襲いかかる天災

二の丸の表御門の竣工も間近にせまった平成3年(1991)9月27日夕刻、広島地方

に台風19号が接近しました。直撃はしなかったものの、最大で風速58.9mを記録した猛烈な風が吹き荒れ、広島市内は大きな被害を受けました。降雨がほとんどなかったことから、電線に海水が付き、その塩害により長期間停電だったことを覚えておいての方も多いでしょう。文化財への被害としては、国宝である宮島の能舞台が倒壊し、テレビ報道等でその無惨な姿が伝えられ人々に衝撃を与えましたが、この時広島城天守閣も深刻な被害を受けていました。その猛烈な風によって鯨瓦のしっぽの部分が折れて落下、それだけでなく落ちた破片がその他の瓦を多数壊してしまったのです。修復工事は足場を組んで行う大がかりなもので、約1年後の平成4年(1992)8月24日に始まり、12月16日に終了しました。しばらく、しっぽが折れた状態だった鯨瓦は、この時新しいものに取り替えられています。

こうして元の姿に戻ったのもつかの間、平成13年(2001)3月24日15時28分、広島市内を強い揺れが襲いました。安芸灘を震源とする芸予地震です。この時、天守閣は開館中で多くの入館者がおられました。幸いケガをした人はおられず、また収蔵資料等への被害もありませんでした。しかし、屋外では多くの瓦が落下、その上またもや鯨瓦が破損してしまったのです。大きな被害を受けた屋根の様子は、当時ヘリコプターによる空撮でテレビ報道もされました。

落下を免れた瓦もいつ落ちるかわからず



しっぽがない鯨瓦

再建当時から天守閣を見守っていたこの鯨瓦は、現在、館内に展示されています

危険な状態だったため、すぐさま天守閣は閉館しました。鯨瓦をはじめ破損した瓦は4月2日から4日までに撤去されましたが、これは命綱をつけた専門業者が手作業で行



鯨瓦が無い天守閣

鯨が下ろされた後、大棟には防水の為の白いシートが被せられています

うというものでした。こうした作業の結果安全が確保されたため、4月7日に再び開館しお客様をお迎えしましたが、鯨瓦が無い天守閣は寂しいものでした。同年、9月6日から遂に修復が開始、天守閣は足場と覆いに包み隠されました。11月27日には新しい鯨瓦が据え付けられ、工事は12月28日に終了、天守閣はやっと元の姿を取り戻したものでした。

その後平成16年(2004)9月7日、台風18号が広島地方に接近、最大秒速60.2メートルの風が吹き荒れました。鯨瓦は落ちなかったものの、多くの瓦が吹き飛ばされて落下しました。この時は、同年12月14日に専門業者が命綱を付けて屋根に登り、修理を行っています。

このように、平成に入って数々の天災に見舞われた天守閣ですが、そのたびに修復されて持ちこたえ、いよいよ来年50歳を迎えます。(本田)

展示室でみつけたよ⑤

か 駕 籠



江戸時代、陸上の乗り物といえば馬もしくは駕籠を思い浮かべる人がいるでしょう。

テレビの時代劇などでもしばしば登場する駕籠は、前と後ろに人足がついて担いで人を運ぶ乗り物です。今でいうタクシーみたいな存在で、ぜいたくな乗り物と見られていたようです。使う人の身分や目的によってその姿形が違っており、庶民が使用していた町駕

籠・辻駕籠は幕府によって厳しく決められていました。江戸の町ではその数までも制限されていましたが、ほとんど守られていなかったようです。

さて、広島城に展示されている駕籠は権門駕籠と呼ばれている種類もので、武士が使っていたものです。庶民が使っていた町駕籠と比べて材料や作り方が随分立派な乗り物でした。駕籠を担ぐ人足も四人必要でした。

その乗り心地はどうだったのでしょう？4人がそろって担いで進まなければならないので、ゆっくりとした動きでのんびり揺られていたのでしょうかね。

(山脇)



中は背もたれやひじを乗せる台があり、疲れない工夫がされており、ゆったりできるようになっています

城下町こぼれ話

広島城にシェパード！？～軍用犬の話

早速ですが、戦前の広島城内で撮られた2枚の写真をご紹介しましょう。二の丸の南西側から東北東方向を写したもので、左から多間櫓と太鼓櫓、そしてその奥に歩兵第十一連隊の営舎が見えます。よく見ると多間櫓が途中で途切れているのが分かり、戦前の広島城二の丸の様子を知ることができる貴重な写真です。



写真は2枚とも米田徳一氏撮影、
米田穰氏提供

が、しかし！！ 周囲の建物よりももっと目を引くのは、1頭の凛々しい犬の姿です。広島城に犬！？この犬は一体どこからやって来たのでしょうか？

この写真が撮影されたのは、昭和10年（1935）前後で、写っている犬の名前は“シーマ”。写真を撮影した方の家で飼われていたシェパードで、散歩の途中に二の丸前で撮った写真です。

日清戦争以降、広島は軍都として発展し、広島城とその周辺には、多くの陸軍関係施設が立

ち並んでいました。また、南側にあった西練兵場では、軍隊の訓練だけでなく、招魂祭をはじめとする様々な催し物や競技会が行われました。軍用犬の訓練や競技会も行われており、板壁などの障害物飛び越え競技や襲撃などの種目がありました。

日本で活躍した軍用犬の犬種として、シェパード・ドーベルマン・エアデルテリアがいましたが、ほとんどはシェパードでした。シェパードが日本にいつ頃入ってきたのか、詳しいことは分かっていませんが、第一次世界大戦をきっかけに、日本政府がドイツで軍用犬として活躍していたシェパードの存在を知り、陸軍が試験的に採用しています。その一方で、1920年代後半には日本シェパード犬倶楽部が発足しており、軍事利用目的だけでなく、当初はペットとしても飼われていたと考えられています。

しかし、昭和6年（1931）におこった満州事変で、“金剛”と“那智”という2頭の軍用犬の前線での活躍が取り上げられたことをきっかけに、軍用犬としての利用が色濃くなりました。翌年陸軍省の認可を受けて社団法人帝国軍用犬協会が発足し、軍用犬の生産と教育を目的に、民間から犬を徴用し、訓練を行いました。軍用犬として飼育された犬は、首に通信用の筒をつけ文書を運ぶ伝令犬や敵兵・爆弾の捜索を行う捜索犬、負傷兵の捜索と衛生品を運ぶ衛生犬、歩哨（営門などの警戒や監視にあたる兵）の補助として警戒にあたる警戒犬など、前線で幅広くその役割を果たしました。広島でも、社団法人帝国軍用犬協会の広島県支部があったと考えられ、その主催による競技会が西練兵場で行われていました。

この後シーマが軍用犬として徴用されたのかどうか…じつは不明なのですが、これらの写真は、戦前の広島城の様子だけでなく、当時の広島と戦争との関わりや軍用犬の歴史の一端を知ることができる貴重な写真なのです。（川橋）



編集・発行

財団法人広島市文化財団 広島城

730-0011

広島市中区基町21-1

電話：082-221-7512

FAX：082-221-7519

平成19年11月7日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

（12月～2月までの平日は9：00～17：00）

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円（280円）

小人180円（100円）

（ ）内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日

ホームページ：<http://www.mogurin.or.jp/rijo.html>